権力獲得の党目指し、さらに前進せよ！

戦旗
共産主義者同盟機関紙
第十一号
一九六〇年四月十一日発行
発行所
東京都文京区元町一の七
世界労仂運動研究所
編集発行人　鍋木　潔
一部　十円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！

「戦旗」固定購読
お申し込は
東京都文京区元町一丁目七
世界労仂運動研究所内
共産主義者同盟書記局
定価　一部　十円
月　三〇円　半年　一八〇円

真の前衛党建設へ！

四月決戦へ、全同盟の体制確立！

共産主義者同盟第四回臨時大会

全国の革命的労働者、インテリゲンチャ諸君！

わが共産主義者同盟は、今回第四回臨時大会を開催し同盟一年五ケ月の経験の上に、権力獲得をめざす真の前衛党の建設に向つて、さらに飛躍的な一歩をふみだした。

第四回大会の基本的意義は何か？

それは、同盟が一年五ケ月のきびしい階級闘争の試練の中で、とくに昨年十一・二七闘争以降のゆれ動く情勢の中で、自らを強力な戦闘部隊にきたえ上げてきたことを確認しつつ、しかもなお進展する情勢に決定的に立ちおくれてる現実を分析し、当面する安保改定阻止の決定的闘争の中で、同盟を権力獲得の武器としてきたえ上げる一連の方策を明らかにした点にある。

大会は何を検討し、何を明かにせねばならなかつたか？

第二創成期にむかい前進せよ！

それはまず、同盟創立後十五ケ月の活動を仮借なく総括し点検することであつた。

「十五ケ月——われわれはいくつかの大きな、だがきたるべきそれに比べるならば極度に小さな、試練をのりこえて進んできた。妖怪から一つの政治勢力へ成長し、批判的勢力の結集から、最もすぐれた唯一の卓抜せる革命的理論と政治方針をもつ革命党への脱皮をめざしてばく進した。」

「二十年前に死滅したはずのトロツキズムは最左翼の集団と運動を語る言葉として、今や日本における最新の流行語とまでなつた。」だが「われわれが主体的に追求してつくりだした情勢の急激な進行の前に、はげしく変転する日本労働運動の危機の進行の前に、いちぢるしく立ちおくれている同盟の現実に対する苛惜ない自己批判と点検を通して評価されないならば、われわれは自同ら盟の歴史的生命を終ることとなるであろう。」（大会報告）

昨年六月第二回大会は、小ブル的な「ソ連無条件擁護」などのスローガンとともに主としてはじめは第四インターへの加入の組織問題を提起し、ついで全学連の四・五月闘争では、公然と「安保ゼネスト反対、当面の中心課題は合理化」という経済主義的スローガンをもつて立ち現れた革共同の日和見主義者と 完全に 分離し、単一の全国組織として自らを確立した大会であつた。

八月の第三回大会はこの上に立つて「①同盟綱領の確立②職業革命家を中心とした組織への発展③単一の全国政治新聞の発行を中心として真の労働者党への転換の課題を提起した」そして三回大会以後、敵の安保と炭労への新らしい正面突破作戦に対する闘争を通じて、同盟は急速に前衛としての姿を大衆の前に示し力を獲得しはじめた。昨年十一月われわれは、ついに印刷所の操業開始とともに、戦旗の発刊に成功した。

全国にわたつて急速に職業革命家が育成され、組織の中核として根をおろしていつた。一応それまでの理論的蓄積の上に、綱領第三次草案は提出された。

だが、わが第四回大会は、このような前進をもつて、満足するには現実の事態は一層急速であり、一層きびしいことをみないわけにはいかなかつた。

「資本主義の新たな発展と攻撃はついに日本社会党の分裂によつて、日本における社会民主々義の政治的組織的再編成を一挙に表面化し、妥協を許さぬ極度に階級的なブルジョアの攻撃は民同型改良主義の破産を促し、労働運動指導部の急速な右翼的再編成を進行せしめるにいたつた。日本労働運動の危機はおそるべき規模と速度で進行している。

われわれは一月の国労の右旋回にも、今われわれの眼前で、指導部をのりこえて流血の激突にまで進んだ三池の労働者の戦闘にも間に合うことはできなかつた。完全にしめ殺さねばやまぬ三池への攻撃は、遠からず全産業の労働者におそいかかつてくるだろう。指導部の裏切りをのりこえて進もうとする下部労働者大衆と、資本の激突はさけられない。その決定的対立の前に、中間政党とその勢力の没落はさけられない。一切のカギは、わが同盟がわれわれがどれだけ早く巨大な成長をとげるかにかかつている。日本階級闘争の新たな段階は、うたがいもなく西尾新党——全労とわが同盟の対決によつて結着をつけられるであろう。」

右翼的再編の中に労働者階級の敗北を許すか、民同、日共の裏切りにたすけられて進出する全労と、西尾新党を打倒し、革命的再編の作業に勝利しうるか、われわれは今やその真価を検証される重大な局面の関頭にたつて、いかにして第二の創世紀ともいうべき展望をきりひらくか、——これこそ第四回臨時大会に課せられていた決定的な意義と任務だつたのである

南部の革命的労働者を代表し、代々木官僚の弾圧に屈せず闘いぬいた日共港地区委員会傘下の革命的共産主義者同志諸君との合体を心からの歓迎をもつて決定し同盟四回大会はこの課題にこたえるため、書記長の報告と三池の現地で流血の闘争の先頭に立つて闘つた中央派遣同志の報告にもとずいて、白熱的な討論を展開した。

われわれが直面する情勢の中で明確な権力獲得への展望にもとずいて、政治的思想的組織的に自らをきたえるために、直ちに遂行しなければならないことは何か？

四回大会はこの点に向つての討論の上に、満場一致をもつて、次の諸点を決定した。

第一は、われわれが来るべき四月の安保改定をめぐる決定的戦闘を直ちに全力をあげ闘いぬくことである。

安保批准を粉砕し日本革命の展望を開け！

帝国主義世界は明かにその決定的な危機の条件を次第に準備しつつある。

世界市場の統一性の回復とともに、西欧資本主義の力の回復と、アメリカ資本主義の相対的地位の低下は明らかとなつた。

五八年末の通貨交換性回復後、五九年初めの欧州共同市場の発足に始まる現在の国際的自由化競争は、資本対資本の闘争が開始されたことを示している。力を回復した各国ブルジョアジー相互の力関係はいまだ決定されていない。各国ブルジョアジーは、現在獲われつつある力を基礎に力関係、勢力圏の確定を要求している。

だがこうした自由化は、一九四〇年代に世界ブルジョアジーが理想図として設定した（ブレトン・ウッヅプラン）ものとは同一には進行していないし、ましてや第一次大戦後の自由化とは異つている。現在の自由化はブロック化を前提条件としてのみ展開している。帝国主義的関税政策と見なされた欧州共同市場をはじめとする一連のブロックの形成の進行は、自由化への対処として、いわば自由化による市場争奪戦での国際競争力の獲得を当面の目的としていることは明かである。ドルを基本通貨として固定為替レートをとつた戦後の管理通貨制度のもとでは、三〇年代の市場競争戦において主要な闘争手段として用いられた為替ダンピングは、武器となりえない。したがつて国際競争戦の武器は、価格競争に求められざるをえないとすれば、競争力の優劣を決するものは直接的に資本蓄積の大きさであり、生産力・生産性の優劣とならざるをえない。ここから、単に一国的規模での資本の集中のみならず国際的規模でも、巨大資本間の結合の強化、国際的トラストの結成、労働力市場の国際的組織化が要求される。この国際的結合を、国家が仲介せざるをえないことは明らかである。

こうしてブロック化は、自由化の前提条件獲得を目的として、自由化の進行とともに進んでいる。いわば自由化はブロック化を促進しつつ進行せざるをえない。したがつて、この自由化はその出発点で、すでにその崩壊の契機をはらんでいるのであつて、矛盾はその進行とともに拡大し、自由化の時期が短命に終ることは明らかである。

自由化は、貿易為替の国家管理を撤廃させ、商品と資本の移動の自由を実現し、世界市場の統一性、循環の国際性を回復した。だが、金融政策の弾力性を奪う国際的金利の平準化、財政赤字回避のための均衡財政政策などは、戦後復興期に、貿易為替の管理制度に補強されて景気循環を調整しうるかに見えた、国家独占資本主義的諸政策の力を急速に失わせている。同時に過去に投下された設備投資が生産能力化し、生産能力の一般的過剰が形成され、独占価格崩壊の条件が作られつつある。独占価格は、それを支えていた財政諸措置が有効性を失うや崩落し、相互に結合されることのない莫大な過剰生産手段と過剰労働力が生みだされて矛盾は爆発するであろう。

そして世界市場の統一性、循環の国際性の回復は、恐慌が世界恐慌として発現する前提条件を成熟させた。一度び、危機が開始され、世界市場が縮少に向う時、厳重な貿易為替管理、帝国主義的関税政策による国内市場の保護、独占価格の維持、これによる海外市場への進出としてブロック化は一斉に進行するであろう。すでに再生産過程に深く介入した国家は、資本の意志と一体となつて帝国主義的進出の前面に立つにちがいない。

矛盾の解決は、またしても力による決算、帝国主義戦争である。

恐慌と帝国主義戦争の前提は自由化の過程で成熟しつつある。そしてまた、自由化への過程はプロレタリアートへの各国資本家の徹底した合理化による攻勢の道である。市場競争での強さは、この攻勢の進展の度合いによつて決定される。

それは、一連の労働貴族育成の道とともに、搾取の強化による労働者階級の反抗の増大をもたらさずにはおかないだろう。

労働者階級の反逆を圧殺することによつて資本主義的対立を一層激化させるか、労働者階級の反抗の増大によつて、より早く資本主義の危機を生みだすか。いずれにせよ事態の真の解決はプロレタリア世界革命による資本主義の打倒なしにはありえない。

危機の深化とともに、左翼の分解は国際的にも急速に進んでいる。

新たなインターナショナルへの準備は、正に火急の任務となつた。

われわれは同盟中央委員会のもと、国際部を設置し、『戦旗』『共産主義』主要論文の英、仏、スペイン語訳の開始からその活動を開始することに決定したのは、現在直ちに新たなインターナショナルへの準備を開始することなしに、資本主義への国際プロレタリアートの闘争の自然発生的爆発を拱手することは犯罪にひとしいからである。

しかし、プロレタリア世界革命への展望は、いうまでもなく日本において現実に闘われている決戦的階級闘争の帰趨にかかつている。

自由化の推進とともに、日本ブルジョアジーは貪欲な帝国主義的野望達成をめざし、安保改定を政治攻勢の中心にすえている。

だが、その脆弱な資本構成と、生産性の低さによつて対外競争力の弱さを特徴ずけられた日本資本主義は、世界有数の戦闘力を有する日本プロレタリアートの反抗を血のローラーでおしつぶし、徹底した合理化と安定的労資関係をつくりだすことなしに、現在の国際的資本の死闘に、勝利することはできないのだ。

決戦は資本家の側から開始された。

労働者階級は強力な戦闘力を持ちながら、分散させられ各個撃破されている。

そして今、世界有数の階級的意識に燃えた三池のプロレタリアートに対する虐殺を手始めにした無慈悲なセン滅戦が進んでいるのだ。

三池が無為にセン滅される時、それはひきつぐ一層大きな敵階級の攻撃を誘導し日本プロレタリアートの全労的安定の道は大きく開かれるであろう。

もちろんわれわれは事態を全面的右傾化として語るペシミズムとは無縁である。

かれらの攻勢の進展、資本蓄積の鉄の論理は、資本主義の墓堀人を生みださずにはおかないのだ。

このことは、現在の指導部の右傾化に伴つて、新たな左翼諸潮流（社会主義協会、社会党青年部——社青同の活動の活発化、共産党内構造的改良派の分派活動の準備など）の胎動と、その加速度される相互闘争の熾烈化に政治的表現を見出している。

だが、この左翼化の過程を墓堀人の誕生によつて一般的に語つているとすれば、正にそれは安易な客観主義者であることを自ら示すものに他ならない。

事態の決定的推移は、正に現在進行しつつある階級的闘争を[illegible]左翼的ヘゲモニーで徹底的に闘いぬくかにかかつているのだ。

自らの生命をかけた資本家階級の現在の正面突破作戦をうち砕く闘争にこそ、日本革命の展望はかかつているのである。

とくに現在、三池闘争勝利のために、一切の裏切りをのりこえて、全国からのオルグを含む実力坑道占拠によつて、生産再開阻止の闘争を組織しなければならない。もはや一切の妥協はありえない。藤林斡旋案は実力で粉砕されねばならぬ。

わが同盟は、このための革命的爆動を全国の労働者に展開するであろう。

四回大会は直ちに二名の中央委員を現地に派遣した。

しかし、われわれが階級一般の方針を立てることに甘んずるとしたら、それは評論家への転落を自ら示すものでしかない。

闘争の中心点、それは四月廿日から廿六日にかけての国会での安保批准を阻止するために、労働者・学生のストライキを基礎にした徹底的な国会デモを組織することである。この方針を街頭主義と嘲笑するものは、自らそれに上廻る闘争を組織してみよ。

四回大会は、いかなる日和見主義をものりこえて全力をあげてこの闘争にとりくむことを決定した。

四月闘争の爆発は、敵階級どのさらに新たな激突の局面をみちびきだすだろう。

われわれは、この闘争の中で全電通をはじめとした春闘の革命的ヘゲモニーをにぎるべく全力をあげ、さらに近い将来に全国単産の指導権をにぎることを火急の任務として設定した。

全学連第十五回大会の勝利に示される学生戦線における日和見主義者との闘争の新たな段階をも、われわれは彼らの完全な駆逐の過程として闘いぬくであろう。

同盟四回大会によつて、われわれは正に全同盟の戦闘体制を確立しおわつた。

全同盟員諸君！

全労働者諸君！

四月闘争に全力量を投入せよ！

綱領第四次草案をつくれ！

理論的停滞を打破せよ

大会決定の第二は、同盟の理論の飛躍的前進をかちとるための一連の方策である。

綱領第三次草案に示れる同盟の理論は昨年のわが同盟の飛躍的成長の中心的要因であつた。しかし、昨年後半来約半年間、われわれの理論創造の努力は中央において全く停滞してきた。

左翼陣営内部における党派闘争のしれつ化は、われわれにさらに飛躍的な理論的努力を要求している。

構造的改良派がその日和見的本質をおおいかくして一見精ちな理論によつて左翼の分解に一定の役割を演じている時、われわれの一刻の停滞も、犯罪的となる。

革命を目指す前衛党は、決して単に大衆組織の指導権を掌握し、その中に一定の活動家を獲得しただけでは権力獲得を達成することはできない。

革命はプロレタリアの闘争力を反乱の勝利にまで導く革命の技術に習熟した前衛の存在によつてのみ保証される。

前衛党の根幹となるもの、それは何よりも明確な理論で武装された革命の専門家の集団である。

自己の主体的な立場の確立なしに、大衆闘争の波の間に溺れるとしたら、それは直ちに前衛党にとつての死をもたらすであろう。

同盟は、権力を獲得しうる党となるためには、直ちに一切の理論的停滞を打ち破らねばならない。

第三次綱領草案は、疑いもなく当時の同盟の理論水準を確立したものであり、発表とともに浴せられた日和見主義者の罵倒にもかかわらず、理論としての正当性を基本的に証明した。

しかし、われわれの直面している課題、労働者階級を結集する同盟の旗印としては、すでにそれは歴史的生命を終つている。すでに第三次草案の段階で同盟内外の理論活動を展開することは許されない。

四回大会はこのために、第四次草案を起草することを綱領起草委員会に命じた。

綱領新草案は、世界帝国主義の現状と日本資本主義の動向、その中でのプロレタリアの闘争の総括と今後の方針、同盟の権力奪取への当面のプログラムを明かにするものとして、ただちに準備されるであろう。

決戦に備え全同盟の活動を飛躍的に強化せよ！

大会決定の第三は、来るべき決戦に備えて、全同盟の活動を飛躍的に強化する一連の措置である。

四月闘争から開始される一連の階級的激突は、おどろくべき早さで階級戦の白熱化と労働者大衆の日和見主義からの離脱をもたらすであろう。

来たるべき戦闘に備えた技術と物力の確保こそ当面の急務である。

①戦旗は六月迄に四頁建とし、印刷所に印刷機と活字鋳造機を確保することによつて赤色宣伝の一大基地を確立せねばならぬ。

同盟の方向を左右する最強力な一群の指導者を戦旗編集局に一挙に投入することによつて、われわれは戦旗を全同盟の神経系とするだろう。

②地方委員会は、プロレタリア的英雄主義に貫かれた活動家によつて活動力を増している。三池闘争についての幾百言を費す他のトロツキスト諸君に比べて、われわれは現実に三池闘争を掌握しその影響を全国的に拡げるために心を砕く。

しかし現状を打破するためには、形式化した常任の確立ではなく、専門的革命家の凝成が必要である。地方組織に常任の確保を要請する代りに とくに、京浜、阪神、中京、北九州の四大拠点から全国各地方へわれわれは中央から強力な組織者を派遣し、残りくまなくわが同盟の影響を確立するだろう。

③革命理論の 武器として「共産主義」は月刊化を目指して全力を上げて強化せねばならぬ。さらにわれわれは出版局を設け書籍の発行に着手せねばならぬ。本年中には同盟理論の集大成としての「講座」発刊を開始せねばならぬ。

④昨年の四月に比較する時われわれの財政活動はその規模を十倍化した。しかしわれわれは直ちにさらに倍加せねば活動できねい所に来てる。英雄主義だけでは革命はできない。物質的裏付けが必要である。組織財政以外に、大口、小口、固定、臨時カンパ、本格的な事業計画を組織せねばならぬ。

百のデスクプランより一円のカネである。ユダヤ人的実利性に徹した財政的活動をボリシエヴイキ的に組織せよ！

同盟四回大会は以上の方向を飛躍的に推進するため、中央委員会を改造した。

基本的に、常任的な革命家によつて三二名の中央委員会が選出され、中央委員会は、左記の人事を決定した。

書記長　島　成郎
政治局員　島　成郎
飛鳥　純　岡田真吾
加藤明男　岸本健一
北沢道夫　姫岡玲治
森　茂　家代　忍
鍋木　潔　山崎　衛

全日本の労働者、革命的インテリゲンチャ諸君！

三池で日々進行しつつある事態、それはまさに、資本家階級にたいする火のような憎しみで武装された、おそれをしらぬ革命家の集団として、わが同盟を強化する以外に、日本労働者階級の革命的進路はありえないことを示している。今こそおそれずわが同盟に参加せよ！プロレタリア革命の旗の下日本革命の勝利めざして前進せよ！

四月闘争を徹底的に闘いぬけ！

権力獲得の党、共産主義者同盟に結集せよ！

全世界に新たなインターナショナルを組織せよ！

革命勝利のために！

日共港地区党、同盟に統一

日本共産党港地区委員会は昨年十二月、公然たる党内闘争を声明したが、四ケ月間の実践と討論をへて同盟中央委員会との間に完全に意志が一致し、双方の組織統一を行うことを決定した。そして同盟第四回大会は、港地区委員会に結集した同志たちが、わが同盟の戦列に参加したことにたいし、満場の拍手をもつて心からなる連帯の意志を表明した。日共港地区の第五回臨時地区党会議で同盟との統一を決定した声明書の全文は次の通り。

世界革命の旗の下　共産主義者同盟に結集せよ！

——第五回臨時港地区党会議声明——

地区党ならびに全党の同志諸君!!

全日本の革命的労働者諸君!!

昨年十二月、われわれが「プロレタリア革命の勝利のために公然たる党内闘争を展開せよ」なるスローガンのもとに、プロレタリアの真の前衛の確立にむかつて一歩踏みだしてから約四ケ月の月日が経過した。そしていま、このスローガンのもとに結集した地区党の同志の意志にもとづいて組織された第五回臨時地区党会議の決議としてわれわれは諸君の前に呼びかける。プロレタリア世界革命の旗のもと共産主義者同盟に結集せよ!!と。

われわれが共産主義者同盟との統一を決意するに至つたのは以下の理由にもとずいている。

（一）

結党以来、三八年の歴史を有する日本共産党は、幾多の戦闘的プロレタリアートとインテリゲンチャを結集してきたにもかかわらず、ただの一度たりとも、真の前衛としての姿を階級闘争の舞台の上に登場させてはこなかつた。三八年間の「革命的伝統」という公認の歴史の背景をいろどるものは、革命運動の敗北と指導部の裏切の一貫せる連続であり、それを合理化するための官僚主義党機構のたえざる再編強化であつた。十一・二七から一・一六にかけてのことはもちろん、三池激突にたいする共産党中央の方針をみよ。四月闘争にたいする方針をみよ。そこにあるものは無内容な統一と団結論のくり返しでしかない。したがつて日和見主義と改良主義に転落した日共中央に対して公然たる闘争を宣言することは、プロレタリアートの勝利を第一義的に考えるものにとつて当然の義務であつたのであり、われわれが投げかけた焔は、全日本の戦闘的労働者と学生の間に絶大な支持を見出したのであつた。日共中央と訣別し、プロレタリア革命の勝利に向つてわれわれが踏みだしたことは、疑いもなく正しかつたし、その有する歴史的意義を再度強調することができる。そしてわれわれは自らを前衛として確立する為に、羽田闘争を全力をあげて組織し、日本の政治情勢の動向にとつて決定的分岐点となつてきている四月闘争の勝利のために全エネルギーを傾注し、同時に真の前衛の建設はいかなる観点にもとずいて組織されるべきであるか、繰返し討論を重ねてきた。日共内部の矛盾の拡大はおおうべくもない。羽田闘争を契機にまき起つた左翼的再編の波は、日共内部にも波及し、拡大していることは、大阪府委員会に対する弾圧をみても全く明らかである。しかし、日本共産党と国際共産主義運動の批判的総結の上にたつて問題を提起するとき、左翼反対派として日共の再生に努力することは革命的プロレタリアートの期待に応えるものではないとの結論に到達せざるをえなかつた。

（二）

歴史の教訓は、結党以来ただ一度も、前衛としての役割を果すことのできなかつた日本共産党の根本的誤謬が、その国際権威主義と「一枚岩」の党組織論にあることを教えている。レーニン死後の第三インターナショナルは、世界革命を放棄し、孤立したソヴエト・ロシアの維持を自己目的化する一国社会主義論と革命論理によつて既に破産した労農民主独裁にもとづく二段階革命論に花を咲かせ、第二次大戦のさなかには、「反ファッショ戦争」なる規定のもとに帝国主義ブルジョアジーとブロックを結ぶことにより各国共産党をして協調主義の路線を採用せしめ、戦争を内乱へと導くことを放棄した。マルクス主義からの背離を意味するスターリン主義のこの恥ずべき路線は、戦後十五年間、ますます拡大再生産され、両体制の平和的共存に夢を託し、平和、民主々義を共産主義運動の基本路線にすりかえるフルシチヨフ路線となつて世界プロレタリアートの前に立ち現われてきている。階級利害よりも民族の利害を、プロレタリアートの勝利よりも愛国民主勢力の団結を説く日本共産党の民族主義、改良主義は、まさにかかる国際的背景を基盤としてのみ存立しているのであり、国際的権威におもねる教条主義をはびこらせ、反対派を暴力的に圧殺する官僚主義を維持しえたのであつた。コミンテルンは解体し、コミンフォルムは解散した。しかし一国社会主義論と平和共存路線を基軸とする公認の国際共産主義運動のきずなは、モスクワ宣言以来の動向を見るまでもなく、ますます強化されている。したがつて階級闘争の決定的局面にいつも裏切り的役割しか果すことのできない日共中央と闘い、プロレタリアートの解放闘争を勝利せしめるためには、スターリンによつて葬り去られた世界革命の旗を高らかにかかげ、新たなるインターナショナルの展望のもとに現実に生起している階級闘争を徹底的に闘い抜く指導部＝前衛を自ら確立しなければならない。日共に再生の期待をかけ、批判勢力としてとどまることなく、自らの思想を物質化するべき組織を自ら建設すること、これが今日における最大の急務である。

「黄金の六〇年代」というブルジョアジーのはなやかな繁営の欧歌にもかかわらず、世界資本主義の危機の爆発の要因はその内部から成熟していつている。だが、われわれがたんなる批判勢力あるいは左翼反対派としてとどまるならば、再びプロレタリアートの大敗北を喫することは必至であり、その責任の一端をわれわれ自身も負わなければならない。日本プロレタリアートの運命を左右するであろう四月闘争の重大な局面を前にして、日共から分離した真の前衛の政治的、組織的結集をわれわれがみずから主体的におし進めていかなければならない理由はまさにここにある。

（三）

十二月以降四カ月間、われわれは安保闘争の勝利に全力を傾むけるなかで何回となく討論をくり返し、以下の結論に到達することができた。そしてその結論をもつてわれわれと同じように世界革命と新たなるインターナショナルの展望のもとにみずからの組織を確立した共産主義者同盟の中央委員会と組織統一についての話し合いを行つてきた。討論の結果、同盟中央委員会と日本共産党港地区委員会は、すべての点で意見が一致し、四月に開かれた共産主義者第四回大会を機会に統一することを決定し、同盟第四回大会はそれぞれ第五回臨時港地区党会議とそのことを確認した。

そのことによつてのみ、新安保が衆議院を通過せんとし、日本帝国主義の政治支配体制の強化の第一段階の完了がまさに終了せんとしている時期に、ゼネストを背景に国会再包囲を実現し、安保批准を粉砕し、左翼的再編成をさらに推進することができるとわれわれは確信している。

われわれは諸君に訴える。日和見主義と改良主義と闘いプロレタリア革命の勝利のため、共産主義者同盟に結集することを！

世界革命と新たなるインターナショナルの旗のもと共産主義者同盟に結集せよ

安保批准阻止、三池闘争を中心とする四月闘争の勝利にむかつて前進せよ！

共産党が共産党という名前だけでは前衛党になりえなかつたと同様に、われわれが共産主義者同盟と統一することのみをもつて自己満足におち入つてはならない。われわれにとつて必要なことは、理論的権威とそれを保証する革命的情熱にあふれた階級的実践のみである。

共産主義者同盟と統一した後も、われわれは、その旗のもとに結集しながら全世界のプロレタリアートの解放のために、全エネルギーを傾むけて闘うであろう。

一九六〇年四月十日

斡旋案を実力で粉砕せよ!!

ヤマの占拠で反撃に転ぜよ！ 生産再開を完全阻止せよ！ 武装警官の暴力に自衛せよ！ 青行隊を三池に集中せよ！ 現地の激突を全国ストへ拡大せよ！

共産主義者同盟中央委員会政治局

三井三池の労働者諸君！ 全炭労の労働者諸君！ 全日本の労働者諸君！

日本の階級闘争の進路を決する三池闘争は「藤林斡旋案」の提示により、最後の段階に入った。

だがそれは、斡旋案を無条件に拒否し、生産再開実力阻止、そのための工場占拠によって反撃に転ずる最後の機会である。

三池の労働者諸君！

首切りの斡旋案を拒否し、ヤマの占拠で生産再開完全実力阻止を最後まで闘い抜け！

全国の労働者諸君！三池の同志は炭労大会が何をきめようと、非妥協に闘う、と声明して!!

血の一滴まで闘う三池の同志を守りぬき階級的総反撃に転ずるため、すべてをあげて三池闘争を支援せよ！

全国からオルグ団を集中せよ！ピケの青行隊を送れ！全炭労全国のゼネストを組め！

「受諾」は階級的裏切りだ

藤林斡旋案が首切り勧告に等しい事は明らかである。「指名解雇」は撤回するが「指名解雇該当者は自発的に退職せよ」などという「斡旋」が、ただ首切りをいいかえたということは論をまたない。それは十二月の中山斡旋案の内容を一層露骨に云い表わし、三井資本の意志を「中労委」の名で押しつけようとするものに他ならない。

これを受け入れることは、完全な敗北であり、無条件降伏であり、殺された同志の血をまったく無にするものである。

資本家階級は今一切をあげて三池の労働者を叩き殺すために激しく動いている。三池をつぶし、炭労をつぶすことが、総評を全労化し安定した労資関係を確立し世界に誇る戦闘的な日本労働者階級を屈服させる鍵だからだ。

斡旋案と同時に開始された第一組合に対する一斉逮捕は、このことを露骨に表わしている。政府は警職法の準備を公言し、六日の関経協総会は、三池闘争の教訓の第一を「法の不備の是正、治安維持の確立」としている。

警察権力、会社、暴力団、第二組合、中労委、政府、新聞の一体となった三池労働者への攻撃は、今、「斡旋案をのめ！」の一点に集中しているのだ。

三井資本家は、生産再開を炭労大会まで見合わせた。何故か。炭労が斡旋案を受け入れるだろうとふんでいるからだ。

労働者の誰が斡旋案受諾を考えているのか。炭労中央である。何故か。これ以上炭労も三池も「まったく闘えない」という思想をもっているからだ。この思想こそ、三池の英雄的闘争を見殺しにしとことまで追いこみ炭労のこの危機をつくりだした日和見主義なのだ。資本家が中山斡旋案を拒否し藤林斡旋案以外は認めないという強硬な態度をとっているのに対し、炭労中央は生産再開激突の前日、統一闘争を解き、自ら斡旋を申請した。

その日から資本家は、第二組合と暴力団をもって生産再開のために第一組合におそいかかった。

彼らは、まず職制とゴロツキ会社につながる連中をかり集め、金でつって第二組合をつくることに成功した。その瞬間から、彼らのスローガンは「第二の結成」から「第二組合による生産再開」にかわったのだ。生産再開阻止が最大の対決点となった。

全炭労の統一スト、賃闘、三鉱連の統一闘争との結合、これを全労働者の統一闘争へ、この方向が三池を勝利させる重大な柱だったことは間違いない。

だが、スト破りの手による生産再開が具体的日程にのぼった時、その実力阻止をぬきにしては一切の「統一闘争」はありえなかった。全労働者の力を実力阻止に集中して、再開を実力で阻止すること、これをテコに全国統一ストライキに発展させることであった。

そして三池の労働者は闘ったのである。三川の兄弟は全力で第二と闘ったのだ。たしかにそれは、三池の局地的闘いとしてしかとらえられず、これをテコに一挙に全国闘争に拡大し、反撃に転ずる、という視点には欠けていた。だが、非妥協の実力阻止は決定的だったのである。

これに対し炭労中闘、三池の指導部さえも廿八日の闘いの意義を正しく掴めるはずがなかった。だから、廿八日の夜に棒など全部回収しようとしたのである。炭労中闘に至っては廿九日久保同志虐殺の後、労働者の怒りを組織するのではなく賃闘の斡旋をのんで統一闘争をとき、三池をまったくの孤立におとしいれて恥じなかったのだ。「藤林斡旋案」の受け入れは、これまでの一切の闘争の成果を踏みにじり、裏切りを実感させるものである。

三池は独力でも闘いぬけ！ 全労働者は安保総決起で應えよ！

だが、にもかかわらず、廿八日の流血から闘争の様相は一変している。局地的闘いに止っているとはいえ、上部指導者をのりこえた三川労仂者の闘争は、生産再開を現実に阻止することによって、展望を示したのである。全労仂者の目は三池に吸いつけられた。久保同志の虐殺に対する激しい怒りと増しみは、たちまち全労働者の闘いをひきおこした。九州共闘が、東京地評が、ただちに抗議闘争に立ち上り、総評をつきあげた。廿八日の闘争は、ストライキ闘争が生産再開阻止の流血闘争に転化することによって、三池闘争が全階級の闘争に波及するきっかけをつくったのだ。

「闘う体制がない」などというのは、まったくのデタラメでしかない。三井四山がダラ幹の手で脱落しようとも、美唄は四日臨時大会でゼネストを炭労に要求し、古河・三菱なども、やがて迫る十一万人の首切りを見通して、三池を守り切ることを要求している。

そして何よりも、三池の労働者は、一人のこらず敵への憎しみにもえているではないか。斡旋案の出たその日、千五百の傍聴者のつめかけた三池中央委員会は、首切り撤回まで断固として闘いぬくことをきめた。「炭労が〃力の限界〃というなら、われわれは、持てる力のすべてをだしつくして、やれるまでやらねばならぬ」—これが三池の意志なのだ。

態度をきめかねて大会を一日のばしにしている中闘に対し、三池労組は単独でも闘うと声明した。もはや大会が何をきめるかは問題ではない。いかに多くが三池の同志を守りぬき、断固とした実力支援闘争に加わるかだ。

今なお闘いを拒むものは裏切り者として追放されねばならぬ。大会は真二つに割れるだろう。だが、闘いのためにそれが必要ならば、問題はいかに大きく左へ結集するか、である。

全面拒否によって、強制就労中止による十日間冷却期間と、「炭労大会待ち」の資本家の期待は一挙にふっとぶであろう。

これに対し、仮処分をタテに数千の武装警官を動員した生産再開の攻撃が加えられるだろう。

これを実力で阻止せよ！

武装警官の弾圧に、労働者は自衛せよ！

ヤマを占拠せよ！

そして、首切り撤回まで闘いぬけ!!

何よりも、三池現地の闘いに一切がかかっている。現地の流血の激突は、全労働者をふるいたたせずにはおかない。裏切るものの姿は全労働者の眼に増しみをもってやきつけられるだろう。たとえ大会が何をきめようとも、三池は単独でも闘いぬけ！

全九州から、全国から青行隊を三池に集中せよ！

現地の激闘をテコに、全国闘争に発展させよ！

三池、九州拠点共闘、美唄の抗議スト呼びかけにこたえ、ゼネストを組織せよ！

三池現地の非妥協の実力闘争と、これに応える全国闘争は、全階級情勢を一挙にかえるにちがいない。低迷する春闘・安保闘争の様相は一変するだろう。

三池闘争を闘いぬけ！

力には力でこたえよ！

安保批准阻止の決戦と結合せよ！

斡旋を拒否し、全力を三池の実力闘争に集中して総攻撃への血路をひらけ!!

安保決戦迫る すべてを4・26へ！

闘いは最終段階に 自民廿二日単独採決ねらう

三池の闘争の影にかくれた感のある安保闘争は、最終的な決戦に向って進んでいる。審議がまだ本条約の逐条審議にも入らず行政協定には全然ふれていない段階にもかかわらず、自民党は五日の衆院安保特別委員会で、六・七日総括質問、八—十八日一般質問、十九・二十日公聴会、二十一日締めくくり質問、二十二日討論採決という連日審議の日程案を提出し、川島幹事長は四日記者会見で、二十五日までに審議打ち切り、単独採決を行う意向を表明した。大野副総裁は、単独審議強行のため二日ごろ議員総会を開いて単独審議を「党議」にすると言明し、これまで「単独審議反対」で結集しようとしていた自民党内反主流派は、五日の会合でも「早急な採決反対」を決めるに止まり、安保通過に自民党は強硬手段をとる構えを作りつつある。一方、四月解散の方針がくずれた民社党は、修正案を自民党が全く受けつけないため、修正案否決、審議ボイコットのコースをたどることは必至と見られ、当面慎重審議＝廃案の線で社会党と同一歩調をとらざるを得なくなっており、審議日程をめぐって紛糾な局面が続くと見られるが、自然成立の限度である四月二十六日を前に討論打ち切り、会期延長の決定的段階を迎えることは確実となった。

社会党はこれに対し①十六日から十九日まで県、市町村議員らを動員した全国的な世論盛上②二十日から二十六日までを「国民総決起週間」として国会に対する大衆請願運動を集中、特に廿六日を最大のヤマとして党執行部に特別策対委を設け、関東近県の党及び諸団体を動員して大衆行動をおこす③二十七日から五月一日にかけてはメーデーと結合して最高度に盛上げる、との二段階闘争方針を五日の中執で決定した。院外では三・三一の青学共闘の総決起大会が国会デモを止めた後も、東京で予想をはるかに上回る一萬人の動員費を返上した動員をかちとり四月四日には安保批判の会と日中文化関係懇談会の文化人が日比谷公会堂を満員にした講演会を開いたあと国会請願デモを行う等、大きな盛上りを示している。

国会デモを敢行せよ！ 四・一五、総評国民会議放棄す

しかし、総評、国民会議は先号記事の通り批准阻止の全面的放棄—長期闘争だ、批准後こそもっとも激しい抵抗が盛上るという日共の方針が最大の支えになっている—を基本におきつつも下部の盛上りにおされてきわめて流動した情勢をつくりつつある。

四月五日の第十四次統一行動は集会、デモは行わず民間春闘の最後のヤマとされていたが、大牟田で刺殺された久保氏の葬儀の大デモが行われているのに炭労二九五円という戦後三番目の低さのあっせんをのんで賃闘を打切ったため、合化の二十四時間スト以外は何にもなくなってしまった。

最大の焦点である二十六日の行動は、幾度かの変転のあと五日の国民会議幹事会で十五日から二十六日までを十五次の統一行動期間とし、十五日は「生産点中心」で集会デモは行わず、二十六日の行動は十五日午後の国民会議中央代表者会議で決めることとした。この経過は、最初十五次は十五日十六次は二十六日の予定だったものが、総評が十五日は国会デモはやらないことをまず決定、続いて民間単産のストに合せて十三日にくり上げ、十六次は全学連に合せないため二十五日か二十七日にズラスことが表明されたが、現に準備が十五、二十六で進んでおり情勢から見てもあまりにも歴然とした裏切のためスケジュールとしては当初に合せつつも十五日を完全につぶすこととなったものである。

だが、社党の方針と呼応して総評としても、何らかの行動で審議のヤマには国会に向けねば恰好のつかぬ立場にあり、三・三一集会でも青学共闘三部議長は「あらゆる妨害をはねのけ国会に行く」とブツたりしており、大衆の怒りと総評の行動がどたん場の二十六日にすべてが集約されて行く情勢である。

だが予測される事態は、二十六日まで、あらゆる準備が放棄され、経済闘争も全部カタがつき結局体制がないからとお座なりの一発に終らせられ、又二十六日は全学連がゼネストによる国会デモの単独強行を決めているため、廿五日にヤマを持って行ってこれをくずすことも十分警戒しなければならない。

最終段階を直前にして、安保闘争の方向を大きく支配しているのは三池の闘いである。今や三池闘争は安保闘争と結びつき、その戦術設定を左右している。国会においての三池闘争をめぐる論戦は社会党を戦闘化させ当面の安保の日程にも影響を与えつつあり、今後現地の激突が再び始まれば警察の弾圧、暴力団取締りから警職法の問題まで再燃することも考えられ、政治情勢を混とんとさせうるだろう。

総評は春闘が完全になくなってしまった中で新らしく生じた形の三池支援に全力を集中しており、安保闘争の放棄が三池闘争支援によって実際上困難となるという複雑な立場に立たされている。特に流血と虐殺が下部労働者に深刻な影響を与えており、これが持続されている中で安保審議の緊迫した政治情勢を迎えるならば、爆発は不可避なものにあるであろう。

われわれは、全力をあげて四月二十六日の最大のヤマに国会包囲を軸とした全国的な闘争を組まねばならぬ。この中核になる全学連のゼネスト、国会包囲のため学生同盟員は全力を結集せよ。当日は各校における激烈なストライキの上に、労働者階級の力を引出す迄国会での坐り込みを解かぬ体制をかためねばならぬ。三池の流血闘争が総評を動かし北九州のゼネストを引出しつつあるのと同じ役割を、全学連は果さねばならない。労働者は全学生の闘いをただちに組合に波及させ、立上らねばならぬ。

これに向けて、労働者全体を立上らせるためには、十五日に独自の国会デモの組織が絶対に必要である。総評、国民会議等に国会闘争を回避させないようにする道は、そのワクをのりこえた国会デモの実績を作っていくことしかない。羽田闘争の組織活動を十五日に向けて再現せよ。社党青年部・地区労協・共闘等も結集の可能性は十分あり、これによって、十五日の国会デモはこの日の国民会議中央代表者会議の空気を一変させるうえにも強力なりとなるだろう。

安保闘争の沮喪は、三池支援と結合することによって発展する。労働者の中の怒りを三池支援の行動に組織し、安保の緊迫した情勢をそこに持ちこめ。

現地の生産再開実力阻止を全力あげてつづけて四・二六に結合させよ。各職場で春闘が終ったか終ろうとしている危機的情勢を、ここではねかえすのだ。

独走体制こそ勝利のカギだ。四月二十六日の闘争(国会の情勢に応じてこれを早める機敏さは当然である)は、日和見主義との大分裂を引きおこすだろう。批准阻止をすでに放棄した日共に続いて予想される動揺を打破るためにも、同盟が中心となっていわゆる戦術左翼各派を結集して指導部のワクを打破り独力でこれを闘いぬくことが最大の中心である。四月二十六日まで衆院通過を阻止すれば、会期延長をめぐって再び闘争の場ができ、六月二十日のアイク訪日が限度なので、五月二十日まで衆院通過を阻止すれば、安保は葬れるのだ。

四・一五 時間内三時間で攻勢へ！ 電通〃春闘決戦〃をボス交の茶番にするな！

我々は、今日まで戦旗を始めあらゆる機会に、電通労仂者・組合幹部諸君に対して、「春闘第一波を最高の実力行使で闘え！安保批准阻止に結集せよ！」と主張し、訴え続けてきた。更に、現在もなお我々は主張し訴える。十五日(第十五次統一行動)を、公社・政府資本家に大打撃を与える実力行動で闘え！時間内三時間を完璧に闘え！と。

適当なボス取引に依って、一票投票で示された七十五％余という下部大衆のエネルギーを再び眠らせるようなことがあれば、それは〃裏切り〃であり、労働者階級の利益を踏みにじるものだ。

電通中央本部は、指令十八号、十九号をもって七日一時間内職場大会を組織させ業務規制闘争に入らせた。だがわれわれは、はっきり云わねばならない！

何故、たった一時間なのだ！公社政府資本家に真に打撃を与える闘争を指令しないのか！

今、炭労三池の労働者は、〃命〃をかけて闘っている。全学連は日共の徹底した妨害をはねかえし、もてる最大限の力をもって十一月二十七日(国会デモ)、十二月十日、一月十六日(羽田)の闘争を再現させ、安保批准をぶっつぶすための闘いを開始している。この時に、電通労働者が共に闘わずしていつ闘う時があるというのか！

闘う部分に依拠し、戦列をあわせる。それだけが、政府、ブルジョアジーの攻撃をはねかえす力であり、安保をぶっつぶし要求をとる力だ。〃調停、仲裁、ボス取引き、中止指令〃などという彼らのペースと縁をきれ！

「十三日〜十五日で大綱…」などという裏切りの方針を下部大衆の力で粉砕せよ、電通労働者の要求は、全労働者の要求であり闘いなのだ。安保批准阻止！岸ブルジョア政府を打倒せよ！三池の闘いを全労働者の闘いに組織せよ！

十三日そして十五日の第十五次統一行動をゼネスト、国会再包囲で闘え！

裏切りをのりこえる力を 青函不乗便闘争に何を学ぶか

国労ばかりでなく倶労全体の突破口として注目されていた、青函地本不乗便闘争は、十割休暇突入の前日あっけなく妥結した。

十五日の国労総決起大会には四千名の労働者が結集した。十割休暇突入は、誰の目にも必至と見えた。

前日の十六日、非番の船舶労働者数百名が数文カンズメで待期するため、旅館につめかけていた。千五百名の動員を指令した函館地区労も、夕刻六時から単産代表者会議を予定していた。午前零時から組合内ビラ貼り。午前零時行動開始の徹夜待期組。午前五時から七時に送られる地区単産の動員…などの細い戦術も決定済みだった。

「妥結」、の青函内ニュースは、こともあろうに道警本部からもたらされたのである。「団交は妥結したが、行動中止にならないのか」本部にいた労働者は、はじめて妥結のニュースを知らされたのだ。本部には、たえまなく分会、各単産から真偽をたしかめる電話がかかってくる。組合事務所にかけつけて激怒する者。「暴動を起すぞ」と電話でどなりこむ者——。十六日午後一時に大綱が決まり七時には全てが終ったのだ。

これは裏切の決定版である。だが、教訓は何か。

第一は、具体的、非妥協の要求をはっきりかかげて闘ってこそ、組織は強化されるということだ。

第二は下部労働者の力は、正しい方針さえ与えられ指導されれば、無限にでてくるものだ、ということだ。

第三、幹部がどんなに裏切っても、下部労働者の手で闘える体制をつくる必要があるのだ。労働者の中に力が十分にあり闘う準備が完了していたのに、青函労仂者が裏切られたのは、これがなかったからだ。

工場委員会をつくれ！ストライキ委員会をつくれ！幹部がどんなに裏切っても、これをぶっこわして資本家と闘かえ！

その中で、裏切幹部を追放するのだ！

最前線

難攻不落〃女子美砦〃 人夫警官使えば全学無期スト

生協強制閉鎖問題

女子美術大学の校庭には、大小の赤旗が林立し、学内いたるところ「生協閉鎖反対」「国会デモへの大量処分を撤回せよ」などのビラが貼りめぐらされている。強制閉鎖に備え、従業員、在京学生はバリケードを作り、泊り込み。全学連、社会党婦人部、区労協、全逓など一大共闘が結成された。ただ一人、共産党だけが「トロツキスト」も出入りしているからという理由で寄りつかない。おかげで闘争は極めてスムーズに戦闘的に展開されている。

学長、理事宅への団交要求波状デモ、教授陣に対する分裂懐柔作戦、駅頭進出。道徳講習会ばりのカンヅメ教授会のもくろみも、共闘側ピケ隊の革命的警戒心のために遂に流会となった。通告期限の四月五日、学校側が予定していた人夫、警官隊の動員による実力閉鎖も延期された。学長は白紙撤回の弱音を吐き出し、団交を恐れて家族もろとも行方不明。人夫を指揮して女子従業員に暴力を振わせた村上教務課長は順天堂病院に逃げ込んで出てこない。それにひき較べわが方の志気は最高。十二日の入学式を一転して学長つるしあげ大会にするために帰省中の学生に檄が飛ばされた。実力閉鎖には無期限ストで。闘いのヘゲモニーは完全にこっちにある。トコトンまで闘うこと。これが私達の勝利へのはらがまえだ。

プロレタリアと文化

「幻視」の革命性 —芳村の埴谷批判の批判—

南 成四

一

われわれが注目する数少い革命的知識人のうち、その発想法の類型を軸にとって一方の極に吉本隆明をすえるならば、その対極に埴谷雄高を位置づけることはさして困難な仕事ではない。

吉本はいう。「まず、わたしたちは、水面上にとびだして、現在、政治的に、思想的に、あるいは文学的に、生活的に直面しているあらゆる困難が、独占支配から派生したものであることを確認した上で、おもむろに水面下の世界に下降してみなければならない。…水面上にとびあがれば、一括して国家独占社会とみえる世界も、水面下に下降してみれば……わたしたちの社会構成と生産様式上のからみ合いは、複雑をきわめていて、どこにも典型がみつからないのである。しかし、ここから社会総体のヴイジョンを組み立て得ないならば、独占支配を眼のあたりにみながら、混乱と分裂と錯誤をくりかえすほか、何もなし得ないのである。」

この吉本の理論構成を下降型の論理と名づけるならば、埴谷のそれは上昇の論理とも云わるべきものであろう。そして、革命と真のエネルギーは、科学だけからも政治的イデオロギーだけからも生まれるものではなく、それは個人の実感等々を噴出口としてそれらを論理的にとらえかえすところにのみ生まれてくるものであるから、これを本領とする下降型の論理は現実の政治過程において大衆を把握し強烈なエネルギーをもたらす殆んど唯一のものであろう。

二

吉本と鮮やかな対照を示しつつ埴谷は、暗黒にのたうつ現代、それをひきさくまばゆい光を遠い未来から投げかけた。

埴谷は、現在的視角を徹底的に拒否することによって政治を根底的にとらえかえし、「敵は制度」であること、またそこから「革命の革命」の必要性を、固くつかみとった。レーニンの「国家と革命」と格闘して破れたという彼であるから、社会の変革が強固な党に指導された激烈な階級闘争なしには行われ得ないことに対する自覚は、当然、彼自身の中に確固として存在しているはずである。にもかかわらず、なぜ彼は「敵は制度」というテーゼにかくも固執するのか。それは、下降の論理の背後に、下降の論理自身をもってしては決して解明することのできない「政治」の黒い顔がつねにまつわりついていて、現実世界を死のにおいで満たしている故に、である。上昇の論理によって下降の論理をたえず限定していくこと、たえずそれを規制するワクを意識せしめること、埴谷は上昇の論理によって「政治」を超克した。

かくて、「敵は制度」であるというテーゼは一の規範であり、それを規範としてつらぬくことによってのみ現実世界に何ものかをもたらす。この規範からする「政治」に対する断えざる—本質的批判としての——「汝はいま人を敵としていないか」という——問いかけによって生み出される緊張こそ、その理論の有効性として取り出さるべきものである。

埴谷はこのことを充分に自覚しているようにおもわれる。「幻視のなかの政治」という表題そのものがこれを象徴していようしまた事実このあと書きにおいて彼は「何処の組織にも属さない私の包懐するものは謂わば現実から遠くはなれた空論にすぎないのであって、に与えうるものではない。ただなんらかのショックをこの巨大な現代政治について考察する薄明の末端にもたらし得ればそれでよしとする」と述べている。されば、彼の内面と外部の現実世界とは極度の緊張関係を保っており、これが彼をしてヒューマニスト以上のなにものかに変えているのだ。

彼は人間なしの制度などあり得ないという反論がやはり真理を語っていることを認めつつ、エンゲルスを引用し、プロレタリアの武装は相手の苛酷な態度によってこちらの態度が決まるということばかりでなくこの言葉はさらにこちらの問定によってによって「敵」が決まるという態度をも示しているから、ここで再び直ちに例の問いかけが出てくる、としてこう述べる。

「バリケードの遠い向うにみえる人影が敵であるほかに、今まで隣りに立っていた男も敵であったというものがいるとすれば、やはりわれわれの敵はこれからもなお人間なのであろうか」

読むものを息ぐるしくさせるこの迫力とは対照的にFLNや中共軍に「敵は制度」という態度を実現した戦術の崩芽を彼が認めるとき、私は奇妙な弛緩を感じるであるが、それは自己の規範が現実として存在すると考えた瞬間に埴谷はすでに内面と現実との緊張関係を失ってしまう、という事情に由来する。規範は、現実と徹底的に切りはなされた上で規範なのであって、FLNや中共軍の戦術を前にわれわれがうける身動きできぬまでの感動は、それらが、「敵は制度」という規範と激烈な戦闘の現実との緊張にささえられつつ現実の状況のなかでとられた行為——自己の生存のためには相手の存在を否定する実在的な未必性を含んでいるといういみでは、埴谷的意味においてもやはり「政治」行為である——だということによるのだ、といえよう。

現実の中に規範を見出したことは埴谷の失敗であった。

三

さて、同志芳村の埴谷批判には学ぶところ大きかったのであるが、その批判の当否はともかく、それ以前に、彼の批判の論理については私は承服しがたい。

理論の当否はその理論の立場に立って検討さるべく、理論そのものへの批判は、その視角において有効とされる妥当領域の構造的限定または否定として行わるべきである。理論ないし広い意味でのイデオロギーは、異った基盤に対してそれぞれ正当性を持つものとして多元的に存在するのであって、それらをぶつけあわせる中で自己あるいは他の理論が検証されたり克服されたりする条件を客観的に論理化していき、この過程ではじめて思想の内在的展開力が獲得される。

芳村は、たとえばルカーチを埴谷に対置し、理論と革命運動との媒介項として組織を考えるならば「革命の側の階級制による政治における暗い死、敵を求めての自己回転は存在しないであろう」と結論づけるが、これは明らかに「幻視」と「現視」の混同である。ルカーチと埴谷は同じ次元で論じられてはならない。いってみれば、埴谷は現実の革命をするには党と大衆との分離というルカーチの理論が不可欠であることを確認した上で、しかも分離により必然的といっていいほど無階級社会の実現が阻害される契機が生まれると指摘するのであって、この「視角」の相異を明確にした上で埴谷批判にむかわないならば、彼の理論を根底的にとらえ得ず、彼我の理論的立場を明らかにしえぬ状況ベッタリ主義の危険に身をさらさざるを得ないであろう。

問題は、芳村の考えるごとく焦点をしぼるべき場所ではなくて、光をあてる側の位置にある。芳村は「幻視」の意味をもっと慎重に思索すべきであった。